

鳥取・米子城跡七遺跡

よなごじようせき

1 所在地 鳥取県米子市加茂町・久米町・西町

2 調査期間 一九九四年(平6)八月～十二月

3 発掘機関 (財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

4 調査担当者 高橋浩樹

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 弥生時代中期・江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

米子城跡七遺跡は米子市街中心部、標高九〇mの湊山(米子城山)の北東麓に位置している。調査地は米子城城下町の内堀と正門に近



(米子)

く、木簡出土地は享保五年(一七二〇)の絵図では鷺見権之丞の屋敷、安政年間(一八五四～五九)の絵図では勘定所となっている。米子城跡七遺跡の調査は土地区画整理による道路建設工事に伴う調査で、道路部分のみの限られた面積で

はあったが、米子城城下町の形成に関わる貴重な成果を得ることができた。

調査の結果、弥生時代中期の貝塚、一七世紀中頃と一八～一九世紀の武家屋敷に関わる遺構・遺物を確認した。木簡は径二m以上、深さ〇・六mの土坑から四点出土した。この土坑は内堀に接するような位置にあり、木簡の他に陶磁器・瓦・建築部材・屋根材が出土しており、廃棄坑としての性格をもつものと思われる。共伴した陶磁器から幕末頃のものと思われる。

遺物は整理用コンテナに約五〇箱あり、弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・陶磁器・瓦・土鍾・銅銭などが出土している。陶磁器が大半を占め、なかでも一八～一九世紀のものが中心である。一七世紀前半～中頃の陶磁器は、家屋の廃棄時に同時に廃棄されており、一括遺物として扱うことができ、陶磁器の編年、組成を考えるうえで貴重な資料である。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「<賢随院様香物源六」
・「<もろげふなこひ」
204×27×2 032
- (2) ・「<賢随院様香物源六」
・「<干いか一」
204×34×3 032

(3) ・「賢随院様香物源六」

・「鯛三」

200×22×2 051

(4) ・「賢随院様かう物源六」

・「□□□」

141×23×3 011

(1) (4)は土坑から出土した。すべて表には同じ記載がされており、源六という人物が賢随院様へ献上するという意味である。賢随院は武家の奥方と思われるが、文献では確認されていない。源六は名字は不明であるが、幕末頃、城主荒尾氏の命を受けて臘の原料の買い付けを行なった景山源六と同一人の可能性がある。

(1)の裏は淡水産の魚名が記載されている。もろげはテナガエビの一種である。(2)の裏はいかとその数量が記載されている。(3)の裏は鯛とその数量が記載されている。(4)の裏は三文字が確認できるが判読できない。

本遺跡では、城下町の形成が海側では一七世紀前半から始まり、その南東側では一八世紀から始まっており、海側から次第に城下町が形成、整備されていったものと思われる。今回の調査では武家屋敷の建物については確認できなかったが、屋敷の境界と思われる溝を検出しており、絵図との併用で米子城城下町の様子が明らかになりつつある。

(高橋浩樹)

